宮崎日日新聞社との連携協力

本学では、学生が時事問題や地域の課題について関心を高めるため、新聞を活用した講義（※）を設け、宮崎日日新聞社からは、その講義に、記者などを講師として派遣していただくこととなっております。

※平成 30(2018)年度後期「時事問題ガイド」（主に 1 年生対象科目）
平成 30 年 9 月 28 日～平成 31 年 1 月 22 日　　15 回講義を実施

平成 30 年(2018 年) 9 月 29 日(土)
宮崎日日新聞社提供

宮日と考える宮崎の明日～宮崎公立大学時事問題講義
新聞の読み方

宮日と考える
宮崎の明日
～公立大時事問題講義から
○1○

新聞の読み方
政治の動向に関心を

新聞紙面はニュースの価値を見出しの大きさと記事の配置で表す。一目でニュースの価値が分かるような作りになっている。

元外交官で作家の佐藤優さんは新聞10紙を購読し、そのうち8紙は電子版をタブレットで読むそうだ。「紙面をめくる半分の時間ですむ」という考えからだが、タブレットの画面は小さいので各面のトップを飾る大きなニュースは把握できても、小さな記事を見落とす恐れはある。佐藤さんは見出しを見て気になった記事はリード（前文）を読み、さらに気になった記事は本文までしっかり読むという。これは新聞社が意図した読み方にほかならない。

横山 博彦（よこやま・ひろひこ）編集委員。1983年入社。メディア企画部長、編集局次長兼制作技術部長を経て2018年から現職。宮崎市出身。59歳。

今年3月に「ペンタゴン・ペーパーズ 最高機密文書」という映画が公開された。1970年代、ベトナム戦争に関する政府の機密文書をめぐって、当時のニクソン政権から圧力をかけられるワシントン・ポスト幹部を描いた。社長のキャサリン・グラハムは悩みながらも「政府を批判しよう」、政治の動向に関心を持たない新聞は存在する意味がないと報道を決断する。

新聞社の活動の根拠は「報道の自由」という概念。合衆国憲法では修正第1条に、日本国憲法では第21条に言論と表現の自由が規定される。ただ、日本の憲法には「報道の自由」という言葉はない。

宮日を含めて新聞各紙は戦争中、大本営発表をそのまま紙面に掲載した。その反省に立ち、戦後は権力の監視を心掛けている。新聞が政府の言い分だけを掲載するようになったら、相当に危ない状況にある。そんな社会にならないよう、政治の動向に関心を持って新聞を読んでほしい。

学生の感想

【1年・明川千夏さん(18)】表現・言論の自由が制限されることはあってはならない。ただ、行き過ぎた自由は人権侵害になり得る。発信する側は平等な視点に立つべきだ。

【1年・神代愛海さん(18)】強い権力を持つ人たちがメディアを操作すると、誤った情報を人々が信じてしまう。自分で情報を見極め、報道が本当に正しいのか、裏に何か隠されていないか考えてメディアと向き合いたい。

【1年・橋口美空さん(19)】メディアやマスコミ・記者などやりすぎではないかと思う時が多々ある。表現・言論の自由で保護されていても、度が過ぎてはいけない。

【1年・小倉麻佑花さん(18)】昔は海外でも日本でも報道機関に圧力をかけたり、事実を隠蔽（ぺい）していたことがあったことを知った。報道機関が政治のことなどを知る唯一の手段なので、中立の立場でいてほしい。

【1年・山内聡佳さん(18)】最近のメディアは事実を誇張して公平公正な報道ができていないと思う。メディアリテラシーを持って、報道に目を向けることが大切だ。

【4年・橋本楓さん(23)】国民のためにある報道機関が圧力をかけられるのは重大な問題。一方で、国民の声から離れた報道を行うことは良いことだとは思えない。

（28日の講義から）

平成 30 年(2018 年) 10 月 6 日(土)
宮崎日日新聞社提供

宮日と考える宮崎の明日～宮崎公立大学時事問題講義
モーダルシフト

宮日と考える
宮崎の明日
～公立大時事問題講義から
○2○

モーダルシフト
運転手確保へ負担減

落合 敬史郎（おちあい・けいしろう）経済部長。1996年入社。経済部次長、報道部次長、文化部次長、地域情報部長などを経て現職。49歳。

モーダルシフトは端的に言えば、貨物などのトラック輸送を船舶や鉄道などに転換すること。これによって、二酸化炭素（CO_2）削減やトラックドライバーの負担軽減を図るという目的がある。

農水省がまとめた「青果物流通をめぐる現状と取組事例」（2016年）を見ると、首都圏への野菜出荷は北海道、関東、九州が中心で全体の8割を占めている。その大半がトラック輸送だが近年、運送業界は急激な人手不足に陥っている。ドライバーの高齢化も進み、長時間労働が常態化している。燃油価格高騰という不確定要素も重なり、対策は待ったなしの状況だ。

モーダルシフトは以前から提唱されていたが、なかなか進んでいなかった。しかし労働環境を安定させ持続的に人を確保していくために、取り組みが徐々に進められている。

県内のJAは長距離トラックドライバーの負担を減らそうと、カーフェリーを利用した輸送で野菜の出荷前倒しを昨年12月から始めた。これまで出荷当日に確定していた荷量のデータを前日に確定。これによって出荷当日は早い時間にトラックへの積み込みが終了するので、宮崎港からの出航時刻に余裕で間に合う上、他県の港も選択できる。積極的にフェリーを利用しようという取り組みで、これがドライバーの負担軽減にもつながっている。「宮崎モデル」とも呼べる取り組みで、こうした動きが広がる可能性がある。

物流は本県経済にとって大切な要素。普段あまり考えることのない「モノを運ぶ」ことの大切さを、一般消費者も考えていく必要がある。

学生の感想

【1年・橋元玲那さん(19)】輸送するトラックドライバーの負担が、思っていた以上に大かかることが講義で分かった。カーフェリー利用はとても効率的だと思った。

【1年・寺原由夏さん(19)】日常生活の中で何げなく使っているものは、物流に携わる人たちのおかげで存在するということを再認識し、感謝するべきだと感じた。

【1年・荒武亮汰さん(19)】コンビニエンスストアでアルバイトをしているので物流の大切さは分かっているつもりだった。運送業界の厳しさを知り、危機感を持った。

【1年・橋口美空さん(19)】モーダルシフトは初めて知った。祖父母が農家をしていて、食べ物を作ってくれる人に感謝していたが、物流を学んで感謝する人が増えた。

【2年・谷口航平さん(19)】物流に対する需要はたくさんあるようだ。投資してくれる人がいれば、厳しい状況を改善していくことができるかもしれない。

【1年・飯田亜衣さん(19)】通販を利用するが、「送料無料」という文字をよく目にする。必ず誰かが運び、送料を負担していることを忘れないようにしたい。

平成 30 年(2018 年) 10 月 13 日(土)
宮崎日日新聞社提供

宮日と考える宮崎の明日～宮崎公立大学時事問題講義
スポーツと地域

宮日と考える
宮崎の明日
～公立大時事問題講義から
○3○

スポーツと地域
合宿誘致で経済効果

本県では2026年、2巡目の国民体育大会「国体」が開かれる予定で、多くの選手や監督らが来県し、PRなどの効果が見込まれている。今年は今月9日まで福井県などで開かれ、本県は39位。各競技団体は強化に取り組んでおり、大きな企業のない本県では高校生らの力を高める必要がある。優れた素質を持つ小中学生を発掘し、育てようというプロジェクトも進められている。

前回1979(昭和54)年の宮崎国体に合わせ、現在のKIRISHIMAヤマザクラ県総合運動公園が整備された。26年2巡目国体に向けても陸上競技場や体育館、プールが新設されることになり、県央に集中させるか、地域バランスを重視して分散させるかが議論された。結局、陸上競技場は都城市山之口町に、体育館は延岡市に、プールは宮崎市に分散整備されることになった。ただ、陸上競技場の整備に関して宮崎陸上競技協会が再考を求める意見書を出すなど反発も出ている。

過去に整備された施設はプロ野球やJリーグなどのキャンプで活用され、地域に経済効果をもたらしてきた。来年のラグビー・ワールドカップ(W杯)日本大会で日本やイングランドの代表チームが合宿を予定するなど、海外の代表レベルも誘致しており、皆さんも見に行くなどさまざまな形で関わってほしい。

2巡目国体へ大事なのは、どんな「遺産」を将来に残すか。施設は維持費など採算面だけでなく、災害時の避難所としての活用も考えるべきだ。開催競技を地域に根付かせ、人会後も住民が楽しめるような取り組みも求められる。

大山 俊郎(おおやま・としろう) 運動部長。1995年入社。高鍋支局長、整理部次長、報道部次長などを経て現職。宮崎市出身。47歳。

学生の感想

【1年・前田紗里さん(19)】勉強中の中国語や英語を生かし、海外から来た人をサポートできるのではと思う。SNS(会員制交流サイト)も利用して宮崎を知らない人に魅力を発信したい。

【1年・瀬尾佑季さん(19)】ラグビーのキャンプを見に行ってみたい。将来観光関係の仕事がしたいので、宮崎で働くときはスポーツに興味を持つ必要があると思った。

【1年・萩原帆南さん(18)】宮崎で国体が開催されれば、経済効果が見込めると初めて知った。施設が整備されることで、県民の暮らしが発展するのが楽しみ。

【1年・明川千夏さん(18)】国体で観光客を呼び込むため交通アクセスを良くしてほしい。体育館は私も地震のときに寝泊まりしたので、整備ではそこも考慮すべきだ。

【1年・櫻川和子さん(18)】バレーボールをしていて合宿でいろいろな人にお世話になった。宮崎に来る人たちが気持ち良くプレーできるように次は自分が手伝いたい。

【2年・池上麻理さん(19)】多くのスポーツ大会やキャンプが行われていることを知った。観戦するだけでなくボランティアで運営を手伝うなどもっと深く関わりたい。

(12日の講義から)

平成 30 年(2018 年) 10 月 20 日(土)
宮崎日日新聞社提供

宮日と考える宮崎の明日～宮崎公立大学時事問題講義
子どものスマホ依存

宮日と考える
宮崎の明日
～公立大時事問題講義から
○4○

子どものスマホ依存
親が問題点整理して

西山 昌彦（にしやま・まさひこ）論説委員会副委員長。1985年入社。報道部員、西都支局長、読者相談室長、文化部長などを経て現職。宮崎市出身。57歳。

厚生労働省は病的なインターネット依存が疑われる中高生が5年間でほぼ倍増し、全国で93万人に上るとの推計を発表した。スマートフォンを使ったゲームや会員制交流サイト（SNS）の普及が背景にある。

スマホが普及してまだ十数年。物心ついた時から身近にスマホがあるのは、大学生のみなさんが最初の世代。どういう影響が成長やコミュニケーションの在り方に表れるのか。この過渡期を観察するのもジャーナリズムの役目だ。

よく大人は「スマホばかりいじっている」と子どもに説教する。何が問題か、よく分かっていなかったから小言で終わっていた。だが、ようやくスマホ依存の悪影響が分かってきた。

問題は大きく四つに分けたい。まず出会い系サイトや個人情報が流出するなどのサイバー犯罪が増えている。

次に健康上の問題。暴力や引きこもり、うつ病などの症状が報告されている。本県ではNPO法人や教育、医療機関の関係者らによる「子どもとメディア」が実態の把握や啓発活動に取り組んでいる。

3番目に事故を起こす危険性。「ながらスマホ」によって自転車が歩行者をはねたり、地下鉄のホームから転落したりする事故が増えている。

最後に頼り過ぎる問題。最近の自然災害で、スマホの電源が確保できずパニックになったり、フェイクニュースが流布したりする事例があった。自らの立ち位置を把握できる別の手段を確保しよう。

文明の利器には、必ず負の側面がある。便利なスマホの何が問題か。親がよく理解して適切な使い方を教えたい。

学生の感想

【1年・山内聡佳さん(18)】小さい子どもは使い過ぎの自覚がなかったり、善悪の判断ができずトラブルに巻き込まれてしまう。ネットの危険性やスマホとの付き合い方などを親だけでなく、学校も子どもに教えるべきだ。

【2年・金丸実幸さん(19)】高校生の時にスマホが気になり勉強に集中できなかったことがある。保護者が使用時間を強制的に制限することは大事だと思う。

【1年・小倉麻佑華さん(18)】しっかりルールを決めることが大事だ。子どもがスマホ以外に夢中になれるものを親が一緒に見つけてあげられるといい。

【1年・田中里沙さん(19)】ちょっとのことをSNSに投稿したり、勝手に撮影したものを載せる人がいる。個人情報がネットに流れる危険性やスマホを使うマナーを家族で話し合う必要がある。

【1年・田中凜さん(19)】子どもは親や年上のきょうだいがすることをまねる。手本となるような使用を心掛けるべきだ。本や自然体験など多くのことを経験させて、スマホ以外の世界を教えたい。

【1年・久保田夏貴さん(19)】あまり親が強く言っても、逆に子どもにはストレスになって使用がやめられないこともある。ある程度自由に使わせることも大切では。

（19日の講義から）

平成 30 年(2018 年) 10 月 26 日(金)
宮崎日日新聞社提供

宮日と考える宮崎の明日～宮崎公立大学時事問題講義
ＬＧＢＴ

宮日と考える
宮崎の明日
～公立大時事問題講義から
○５○

まずは知ることから
ＬＧＢＴ

宮崎日日新聞社は「自分らしく、生きる 宮崎から考える LGBT」と題したシリーズを今年の元日から始めた。1面やくらし面での連載やインタビュー特集などを出し、今も「自分らしく!」のマークを付けた関連記事の掲載を続けている。多様性を重んじる東京五輪・パラリンピックを前に、性的少数者（LGBTなど）を取り巻く環境は国内で少しずつだが改善している。その中で宮崎はどうだろう。取材チームが取材を進めると学校、職場、行政手続きなどさまざまな現場で差別や偏見、不平等があることが見えてきた。

特に子ども時代、いじめに苦しんだり、自分のことが分からずに悩んだりして将来に希望も持てなかったという声を聞き、今の子どもたちやこれから生まれる子どもたちのため、誰もがありのまま暮らせる社会を用意しなければーという思いを強くした。

どんな分野でも大切なのはまず「知ること」だ。知ることにより、自分が誰かを傷つけていないか、困らせていないか、気付くことができる。対応を考えることもできる。

シリーズでは記者たちが国内各地、またスウェーデンで参考になる取り組みを取材し紹介した。県内の当事者団体などが地道に続けてきた情報発信も相まって、宮崎の学校、行政機関、企業でも、授業や研修など「知ろう」とする動きが活発化してきた。「知った」その先に、それぞれの分野でできることを考えたい。性的少数者に限らずあらゆる少数者の声に耳を傾け、一人一人の個性を大事にし、力を発揮できる環境を整えることは、地域社会の活力にもつながる。

中川 美香（なかがわ・みか）生活文化部長。1993年入社。報道部、日南支社、文化部、論説委員会を経て2017年から現職。都城市出身。47歳。

学生の感想

【1年・山田麻結さん(19)】まだまだ社会に理解が足りない。特に年配の方々の理解がなければ、会社に入ったときなどに大変な思いをする人もいると思った。この講義のように知る機会が大切だ。

【1年・吉村美空さん(18)】本人が一番悩んでいる。私たちの意識次第で過ごしやすい空間はできる。私は味方になれる人になりたい。

【1年・萩原帆南さん(18)】ニュースとしてただ報道するだけではなく、社内でも（研修などの）取り組みを進めているということにとても考えさせられ、宮崎の変化の第一歩になっているのではないかと感じた。

【1年・南来希さん(18)】学校で性の多様性について教育して偏見をなくすことや、相談しやすい環境をつくることが必要だ。

【1年・駄田(だだ)さん(21)】社会はもともと、そこに暮らしている人々がつくったもの。人々がどう変わるのかによって、社会がどう変わっていくかが決まる。個性や違いを尊重する大切さ、また世界は彩りだということを広めたい。

【4年・川端琳さん(21)】「普通は」「一般的に」といった言葉が根付いたままだと、少数者は厳しい状況に置かれ続ける。少数者という概念がなくなり、多様性が尊重される世の中になるといい。

（25日の講義から）

平成 30 年(2018 年) 11 月 3 日(土)
宮崎日日新聞社提供

宮日と考える宮崎の明日～宮崎公立大学時事問題講義
宮崎駅周辺の再開発

宮日と考える
宮崎の明日
～公立大時事問題講義から
○6○

宮崎駅周辺の再開発
まちの姿 大きく変化

宮崎市のJR宮崎駅西口で、宮崎交通（宮崎市）とJR九州（福岡市）が大型商業施設「アミュプラザ宮崎」を2020年に開業させる。同駅周辺では「アリーナ構想」や「宮崎駅東通線」の開設など、官民の動きが活発化しており、県都のまちづくりがどう進むのか注目される。

巣山貴行（すやま・たかゆき）報道部次長。2000年入社。報道部、日向支局、整理部、経済部次長などを経て現職。宮崎市出身。40歳。

アミュプラザ宮崎の総事業費は約100億円で、民間商業施設としてはこの10年間で最も大きな投資額となる。売上高は70億円を見込んでおり、駅周辺に新たな消費が生まれ、駅を中心に人の流れが変わることになる。市内の既存の商業施設も少なからず影響を受けることとなる。

同市新別府町に05年にイオンモール宮崎がオープンしたときは、中心市街地は客足を奪われた経緯がある。それだけに、アミュプラザ宮崎への期待は大きい。中心市街地は波及効果をどう引き出せるかが今後の課題となる。

駅東口では同市の戸敷正市長がアリーナ構想を掲げている。25年度には、宮崎港方面に延びる宮崎駅東通線が県道宮崎島之内線（通称・山崎街道）とつながり、海と陸の玄関口が結ばれる。これに26年に本県で開催予定の2巡目国体に向けた施設整備が重なると、まちの姿はさらに大きく変わる可能性がある。

国立社会保障・人口問題研究所がまとめた将来推計人口によると、45年の本県人口は約82万5千人となり、15年と比べて約4分の1も減る。生産年齢人口も当然減る。サービスを提供する側も受ける側も減る。人口減少や少子高齢化社会を予想しながら、効果的なまちづくりを進めなければならない。

学生の感想

【1年・萩原帆南さん(18)】アミュプラザ宮崎には宮崎らしさを求めていない。高千穂通りや橘通りなどに宮崎らしさを出す方がいい。まちづくりには若者の話を聞く場を設け、プロジェクトにも参加させてほしい。

【1年・吉村美空さん(18)】宮崎駅のイメージは高校生かサラリーマンがいるイメージ。子どもや高齢者も居心地の良い場所にしてほしい。

【1年・明川千夏さん(18)】宮崎駅を中心にまちづくりをするなら、交通網を改善してほしい。また、まちづくりには若者の意見を理解し、取り入れてほしい。

【1年・尾上琴音さん(19)】宮崎が大好きなので、アミュプラザ宮崎には宮崎らしさがあってほしい。バスや列車をもっと利用しやすくすることも大事。宮崎が豊かになることに期待している。

【1年・湯浅智裕さん(19)】電車通学でほぼ毎日宮崎駅を利用している。駅は少し寂しいので、にぎわうことに期待している。中心市街地に企業や商業施設をもっと増やせば若者の県外流出を止められるのではないか。

【1年・久保田夏貴さん(19)】宮崎駅に来る人が増えると鉄道、バスの利用者も増えると思う。企業と若者がまちづくりについて意見交換をできる場があるといい。

（2日の講義から）

平成 30 年(2018 年) 11 月 10 日(土)
宮崎日日新聞社提供

宮日と考える宮崎の明日～宮崎公立大学時事問題講義
写真の役割と力

宮日と考える
宮崎の明日
～公立大時事問題講義から
○7○

写真の役割と力
記事の正確さを補う

中島 雅隆（なかしま・まさたか）写真映像部長。1987年入社。2015年4月から現職。宮崎市出身。54歳。

新聞紙面は記事と写真、見出しやイラストなどがバランスよく配置されてこそ見やすくなり、読む人の理解も早くなる。写真や映像の伝える情報量は多く、読者の目を捉える。本紙では紙面全体に写真を使用する「ラッピング」や、満開の桜のパノラマ写真を7ページにわたり掲載するなど読者にインパクトを与える紙面作りに努めている。

写真は記事の正確さと客観性の証明でもある。新聞では政治家や有識者らの顔写真、さまざまな風景写真が掲載されるが、これは記事にうそはなく、写真の通りであることを示す意味もある。運転免許証やパスポート、身分証明書などに本人の顔写真があるのも、写真の正確さが法律的に認められているからだ。

新聞社のカメラマンに求められる必要条件の一つに即応性がある。一昨年の熊本地震では、偶然本紙の写真記者が熊本市に滞在していた。無事を確認した後、無理のない範囲での撮影を指示。本人は戸惑ったと思うが、新聞社の写真記者という自覚を忘れず避難の状況などをしっかり撮ってくれた。

現場では個人の力量がものをいう。どのシーンを撮るかはそれぞれで異なり、それが個性になる。自分なりの視点、構想を持つことが必要で、読者に分かりやすい情報を提供するため、常に技術向上を怠ってはならない。

写真記者はいろいろな思いを持ちながら、日頃の撮影を行っている。写真記者の意図を理解しようとすることも、新聞の読み方の一つ。気軽に写真撮影ができる時代。しっかり保存して、ぜひ自分の歴史として後世に残す作業まで行ってほしい。

学生の感想

【1年・久家三奈さん(19)】写真は言葉では表現できない雰囲気や感情を伝えてくれる。報道の場において、とても重要だと思った。写真を見る人が何かを感じ取れるように、一瞬を切り取ることが大切だ。

【2年・池上麻理さん(19)】一枚の写真にたくさんの時間をかけたり、構図を練って撮影していることを知った。言葉で伝えることができない物を補ったり、読者がよりニュースを理解できるなど、多くの役割を担っている。

【2年・市来采佳さん(20)】新聞写真には、正確に情報を伝えないといけないという使命がある。ニュースの本質を捉えたテーマの視覚化に優れた物が求められる。保存することで、自分の中で色あせてしまう思い出も鮮やかに残すことができる。

【2年・山口翼さん(19)】写真が紙面の価値を高めていることを知った。写真の正確性が読者に、ニュースの本質や状況把握がしやすい情報を提供している。

【4年・渡久地里都さん(22)】写真記者は、読者に分かりやすくかつ簡潔に情報を伝えることを意識している。過去の写真が残っていればその時代の状況を把握できる。素晴らしい役割を果たしている。

（9日の講義から）

平成 30 年（2018 年） 11 月 17 日(土)
宮崎日日新聞社提供

宮日と考える宮崎の明日～宮崎公立大学時事問題講義
災害報道

宮日と考える
宮崎の明日
～公立大時事問題講義から
○8○

災害報道
「読者と共感」が基本

今年に入り、県内外で大規模な自然災害が頻発している。本紙の報道指針は「読者、県民と共感」。災害報道に置き換えると「被災者や被災地に寄り添う」「読者、県民が被災地に心を寄せるお手伝いをする」ということになる。

小川 祐司（おがわ・ゆうじ）報道部長。1992年入社。都城支社長、経済部長などを経て2018年4月から現職。宮崎市出身。50歳。

県内で発生した災害の報道に本紙の姿勢が見て取れる。例えば、4月に霧島連山・硫黄山が噴火した後、えびの市を流れる長江川が白濁した問題。水質悪化について識者の見解を交えながら抑制的に報じ、風評被害の防止に努めた。また、取水制限で多数の農家が稲作を断念したことを受け、米どころとして知られる同市の農家らを1年間にわたり追うことにした。被災地支援と同時に、県民の関心を公助の充実によって防災・減災、復旧・復興の力を高めなければならない。それを手伝うのも地元紙の仕事だ。

災害報道は、中心となる情報が段階的に変化する。「何が起きたのか」に始まり、災害のメカニズムや今後の予測、被災地の課題と対策、検証作業と続く。その過程で風評被害への配慮や被災地への元気づけ、教訓の共有などを意識している。

県外で起きた自然災害の報道では、災害が残した教訓を本県に落とし込むことに注力する。7月の西日本豪雨では、ため池の決壊や洪水ハザードマップの周知不足などが犠牲者を生んだため、県内の実態を明らかにし課題を示した。

本県は噴火や台風、地震など常に自然災害のリスクにさらされている。本県で暮らすということはリスクと共生するということ。そのリスクを正しく理解し、自助・共助・公助の充実によって防災・減災、復旧・復興の力を高めなければならない。それを手伝うのも地元紙の仕事だ。

学生の感想

【1年・山内聡佳さん(18)】県民が必要としている情報だけでなく、県民を元気づけたり、教訓を伝えたりと、地元紙が地元の人々に寄り添うとはこういうことなのかと思った。

【1年・荒武亮汰さん(20)】地元紙の強みやそれを生かした報道の在り方を知れてよかった。マスコミのしがちなセンセーショナルな報道を控えるといったことを聞いてとても良いことだと感じた。

【1年・久保田夏貴さん(19)】災害では「自助・共助・公助」や「教訓を得る、教訓を生かす」ことが、いかに大切なのかよく分かった。

【1年・三浦美寿々さん(18)】北海道地震のその後に関心がある。災害はある期間が過ぎると全く報じられなくなるので、今の北海道の状況がとても気になっている。

【2年・瀬ノ口拓磨さん(19)】自然災害では「減災」に努めることが大切だと思った。台風24号では自分の地区でも停電や川の増水が起き、不安に思うこともあった。そんな中、新聞の情報は大きく信頼できるものであった。

【2年・有馬笙太さん(20)】「段階的に報道内容を変化させている」「風評被害を防ぐ」などさまざまなことに注意していることに気付いていなかったので、これからはそれを頭に入れて読みたい。

（16日の講義から）

平成 30 年(2018 年) 11 月 24 日(土)
宮崎日日新聞社提供

宮日と考える宮崎の明日～宮崎公立大学時事問題講義
ＪＲ九州ダイヤ改正

宮日と考える
宮崎の明日
～公立大時事問題講義から
○9○

JR九州ダイヤ改正
県民 利用する意識を

今年3月にJR九州は大幅なダイヤ改正を行った。県内では15本の普通列車が減便（一部は臨時便で運行）され、運行区間の短縮もあった。

同社側は「ニーズに即して減便を決めた」「サービスダウンはゼロとは言わないが許容範囲」などの見解を示している。しかし、乗客を取材すると「朝課外に遅れる」「部活動に入るのをあきらめた」という高校生や退職を考えた人がいて、実態は違う。

今回の減便は、同社が2016年に株式を上場し、完全な民間企業となったことにも関係があると考える。同社は国から与えられた経営安定基金3877億円を、上場前に取り崩した。以前は基金の運用益で鉄道事業の赤字を穴埋めしたが、この手法は使えなくなった。駅ビルや小売業などで経営多角化し、利益を上げる一方で、赤字路線での合理化を進めている。

本紙は福岡、大分県を走る日田彦山線の復旧議論に注目している。豪雨被害により不通となっている区間の復旧を巡って、同社と自治体で溝があり、一時は鉄道以外の手法も示唆された。県内でも赤字路線が被災すれば、同様に厳しい事態が起きる。

本県の鉄道利用者が多くないことも不安だ。九州の駅別乗車人員は県内で最多の宮崎でも44位。博多1位、鹿児島中央3位、大分4位など、県庁所在地の駅の比較では、他県から大きく離されている。

外国人観光客が本県を訪れる際の交通手段は半数が鉄道という調査結果もある。観光面や日常の足に必要な鉄道を守るため、県民が少しでも利用する意識を持ってほしい。

野辺 忠幸（のべ・ただゆき）報道部次長。1997年入社。串間支局長、高鍋支局長などを経て2016年4月から現職。宮崎市出身。45歳。

学生の感想

【1年・前田紗里さん(19)】鉄道の不便さは人ごとのように考えていたが、観光や経済にも関わり、宮崎で就職しようと考える学生にも密接なつながりがある。一人一人が関心を持つべきだ。

【1年・久保田夏貴さん(19)】電車に1時間ほど乗って通っているので、ダイヤ改正に不満を抱えた人の気持ちはよく分かる。電車の本数や車両の少なさが原因で利用しない人も少なくないのでは。

【1年・荒武亮汰さん(20)】県民が公共交通機関を利用する意識を高める必要がある。ある程度の本数がないと県民は「不便」のイメージが固定化し、乗客は増えない。

【1年・田中凛さん(19)】大分県出身だが、駅ビルに行くために電車を利用することが増えた。宮崎駅にもそういった施設ができれば、増加が見込める。

【2年・山口望さん(19)】県外出身だが、交通が不便で、県庁所在地なのになぜと思った。不便さに慣れると危機感がまひし、交通網が発達しない原因になるのでは。

【2年・中村恭子さん(19)】バスで1時間半かけて通学しているが、減便したら本当に困る。どの公共交通機関も、利用者の声を聞いた上で運営してほしい。

（23日の講義から）

平成 30 年(2018 年) 12 月 1 日(土)
宮崎日日新聞社提供

宮日と考える宮崎の明日～宮崎公立大学時事問題講義
売り手市場の就活

宮日と考える
宮崎の明日
～公立大時事問題講義から
○9○

売り手市場の就活

自分を磨き準備して

経団連の中西宏明会長が9月3日、個人的な意見として採用面接の開始時期などを定めている指針を、現在の大学2年生に当たる2021年に卒業する学生から廃止すべきとの考えを示し、採用の在り方に一石を投じた。

清水 克彦（しみず・かつひこ）報道部次長。1997年入社。えびの支局長、東京支社報道部次長などを経て2017年4月から現職。宮崎市出身。44歳。

指針は、会社説明会が大学3年生の3月、面接などの選考活動は4年生の6月、内定は10月解禁としている。議論が浮上した背景には、国際的な人材獲得競争を理由に、IT企業を中心に通年採用を重視する流れが強まったことにある。

経団連は10月、21年春入社の学生から指針の廃止を決定。これを受け、政府が主導した就活のルールづくりに転換し、21年卒業の学生についても、現行日程を維持することを決めた。ただ、罰則などもなく、ルールの形骸化も懸念されている。学生の不安を拭うためにも、実効性のある方針を決めることが求められる。

一方、今年の就活戦線も売り手市場が続いている。就職情報サイトを運営するリクルートキャリアのインターネットでの調査によると、就職活動で企業の内定を得た19年春卒業予定の大学生のうち、内定を辞退した経験がある人の割合を示す「辞退率」が66・0%に上った。比較できる13年卒以降では過去最高だった。

宮崎新卒応援ハローワークによると、県内でも複数の企業から内定を得て、辞退する学生が増えている。採用予定を充足できない県内企業も少なくない。しかし、人事担当者は「採用のハードルを下げることはない」と断言している。売り手市場に惑わされず、自分を磨き準備を進めることが重要だ。

学生の感想

【4年・渡久地里都さん(22)】（就活を振り返り）3、4月は忙しさによる精神的、肉体的な疲れが一気にでて大変だった。私は就活に専念しやすい環境だったが、卒業研究を行う理系学生はきつそうだった。

【4年・廣瀬沙良さん】就活と学業との両立に正直ストレスを感じた。就活の交通費のためにアルバイトも並行していたので、体を壊すこともあった。

【4年・川端琳さん(22)】仕事上のステップアップを考えると、大都市の企業に地方は及ばない。宮崎で就職する人は減少するのでは。

【3年・河邉喜汰さん(21)】私の出身地も決して都会ではないが、全国に支店や営業所を置く企業の本社が多くある。宮崎発の企業の少なさも、若者が宮崎を離れて就職する原因の一つだと感じた。

【1年・山内聡佳さん(18)】地元で働くことの魅力、企業のいい点をさまざまな視点で伝えるべきだ。優遇制度などがあれば、もっと地元就職に目が向くのでは。

【1年・櫻川和子さん(18)】宮崎の企業を知らないと改めて感じた。留学することを考えているので、就活が不利になるのは避けたい。妥協して就職するのは嫌なので、さまざまな所に足を運び話を聞きたい。

（30日の講義から）

平成３年(2018 年) 12 月８日(土)
宮崎日日新聞社提供

宮日と考える宮崎の明日～宮崎公立大学時事問題講義
地域を知る

宮日と考える
宮崎の明日
～公立大時事問題講義から
○11○

地域を知る
人口減の問題 注視を

宮日の地域面は催しや人の紹介など、細かな地域の話題が満載だ。中でも活性化に関する記事が多い。背景には深刻な人口減少の問題がある。

国立社会保障・人口問題研究所が3月に発表した将来推計人口によると、日本の総人口は2045年までに2千万人減の1億642万1千人に。本県は15年の25・3%減の82万4806人になるという。

人口が減少すると何が問題なのか。地域経済の衰退、空き家の増加、学校の統廃合、交通網の廃止、さまざまな活動の担い手不足…。数え上げるときりがない。地域の活力は奪われ、手を打ちたくても人材も財源も乏しくなる一方。出口のない状態だ。

ただし「田舎が寂れるだけ」と思ってもらっては困る。将来推計人口ではいずれ全都道府県で人口が減少に転じると予想されている。出生率の低い都市部に若者が吸い込まれていくからだ。そして日本全体が先細りしていく。

地方自治体も国も何もしてこなかったわけではない。出生率を高めるための子育て支援、移住・定住促進、雇用の場の確保。地域面にあふれる活性化の記事は必死の取り組みの表れだ。ふるさと納税も本来は財源の乏しい地方に大都市の税収を移す目的で始まった。返礼品に対する規制強化で地方から戸惑いの声が上がっているが、今の日本は「国と地方」「都会と地方」で対立している場合ではない。

これから社会に出る学生たちには、広い世界を見る視点も持ちつつ足元で何が起きているのか見つめることも忘れないでもらいたい。そしてそれぞれ何ができるのか、自分の問題として考えてほしい。

足立 希（あだち・のぞみ）地域情報部次長。1998年入社。報道部、都城支社、整理部などを経て2016年から現職。宮崎市出身。42歳。

学生の感想

【1年・南来希さん(18)】地方の人口減少は、地方のことをよく知らないことから起こる。そこにしかないものを体験できたり紹介したりするイベントを開催すれば活性化につながると思う。

【1年・田中里沙さん(19)】出生率を上げることを考えるべき。子供を育てることが苦にならないような、宮崎ならではの対策が必要。

【1年・谷口礼奈さん】宮崎から出ていく人を減らすには魅力的な就職先があること。入ってくる人を増やすには起業家に優しいまちづくりが必要。

【1年・橋元玲那さん(19)】宮崎は食べ物がおいしく風景がきれい。暖かい日も多い。もっと国内外にPRした方がいい。短期間でもいいので安く宮崎を知ることができる旅行プランを作っては。

【1年・三浦美寿々さん(18)】都市部に人が流出する理由は、人がモノの多様さを求めているからでは。欲しい本が近くの本屋にないなど、地方に住んでいると日常的に経験するのが実態。

【4年・酒井香太朗さん(22)】若い人が都会に出ていくのは仕方ない。それより1ターン・Uターンの人向けの魅力的な取り組みが必要。日本の人口が1億人を切りそうになっていることは驚いた。人ごとではないと実感した。

（7日の講義から）

平成 30 年(2018 年) 12 月 15 日(土)
宮崎日日新聞社提供

宮日と考える宮崎の明日～宮崎公立大学時事問題講義
中山間地の農業

宮日と考える
宮崎の明日
～公立大時事問題講義から
○12○

中山間地の農業
次世代への継承課題

小谷 実（こたに・みのる）報道部次長。1998年入社。小林支局長、報道部員、日向支局長などを経て2018年4月から現職。宮崎市出身。44歳。

本県では県土の9割を中山間地域が占め、県人口の4割が居住している。農業が基幹産業となっているが、急傾斜地が多く生産条件は不利。このため、険しい地形を生かした棚田のほか、狭い土地でも可能な和牛生産や施設野菜など、各地域の特性を生かした農業が営まれている。

中山間地の農業が果たす重要な役割として、多面的機能が挙げられる。景観保全や水源の育成、洪水防止など特に環境面での貢献が大きい。そこで農業を営む人たちは、集落の維持や伝統文化の継承も担っている。

しかし、中山間地における農家の高齢化や後継者不足は深刻さを増している。シカやイノシシなど鳥獣被害の対策に追われ、耕作放棄地の拡大も続く。県内には農地や景観の維持が困難になっている集落も多く、多面的機能への影響が懸念される。

農林水産省はこれまで、条件不利地の営農を支援する「直接支払制度」を実施。自民党内では新たな行政支援として「棚田支援法案」制定に向けた準備が進む。法案には保全が必要な棚田を有する地域を指定し、財政支援を講じることなどを明記。年明けの通常国会に提出される予定だ。

2015年に「世界農業遺産」に認定された県北5町村では、優れた景観や神楽、伝統農法などを地域活性化に生かす動きが活発化している。中山間地が有する多くの地域資源は全国に誇るべき財産。次世代にどう保存、継承していくのかが問われている。日頃から多面的機能などの恩恵を受けている消費者も、農産物を積極的に買い支えるなど心掛けてほしい。

学生の感想

【1年・谷口璃音さん(19)】農業や田舎暮らしに憧れる都会の若者も少なくないと聞く。学生を対象にした短期間の農業体験学習やセミナーの実施など、次世代に引き継ぐことを意識した企画があると良い。

【1年・湯浅智裕さん(19)】宮崎の食べ物はとてもおいしく、質が高い。中山間地の農産品をもっと海外にアピールすれば市場に広がり、地域を盛り上げることができるのではないか。

【1年・三浦美寿々さん(18)】中学、高校、大学生の職場体験を増やす。体験中の食事で収穫した野菜を食べれば、自分と農業の関わり、地元農産物の良さについて身を持って知ることができる。

【1年・荒武亮汰さん(20)】「何もない中山間地」ではなく、「日本の原風景」という発想で都市部へのPRを進めていってほしい。

【1年・木下直美さん(19)】中山間地にある私の地元では、毎年の祭りで神楽や子供歌舞伎を披露して県外からも客を集めている。中山間地の独特な伝統をもっと知ってもらうべきだと思う。

【3年・河邉蒼汰さん(21)】農業についての理解を広めることが大切。農業を始める人を増やすため、収入や初期投資など生計を立てられる見込みがあるのか考える機会が必要。（14日の講義から）

平成 30 年(2018 年) 12 月 22 日(土)
宮崎日日新聞社提供

宮日と考える宮崎の明日～宮崎公立大学時事問題講義
若山牧水没後 90 年

宮日と考える
宮崎の明日
～公立大時事問題講義から
○13○

若山牧水没後90年
短歌の魅力に触れて

日向市東郷町坪谷出身の歌人若山牧水（1885～1928年）が亡くなって、今年は90年の節目だった。雑誌が特集を組んだり、さまざまなイベントが県内外で開かれたり、改めて牧水に関心が集まっている。また、わずか31音の短歌は会員制交流サイト（SNS）投稿に向いているということもあり、若い世代に短歌が見直されている。これを牧水、短歌に興味を持つ機会にしてもらえるとありがたい。

川路 書彦（かわじ・よしひこ）生活文化部次長。1996年入社。東諸支局長、報道部次長などを経て2017年4月から現職。宮崎市出身。45歳。

大学短歌会が各地で新たに発足するなど、若い世代の動きが活発だ。1960年代、90年代に続く第3次短歌ブームとも言える。下支えしているのは高校の活況。日向市で開く牧水・短歌甲子園、盛岡市の短歌甲子園などに出場した高校生の短歌熱が大学入学後も続いているということだろう。

短歌の世界に作品の良しあしだけでない、「勝ち負け」という新たな物差しを持ち込んだことで、ゲーム感覚で楽しめるようになった。賛否あるが「熱」をもたらしたのは事実だろう。

宮崎日日新聞社は県などと、牧水を顕彰する若山牧水賞を運営している。今年は穂村弘さんが決まった。非常に平易な言葉を用い、分かりやすい口語短歌の第一人者。魅力にぜひ触れてほしい。

牧水は学生時代、相手が人妻とも知らず美しい女性と激しい恋に落ちた。〈山を見よ山に日は照る海を見よ海に日は照るいざ唇を君〉のようなストレートな恋。結局2人は結ばれなかったが、牧水はこの恋の前後に多くの名歌を詠んでおり、歌人として大成するいわば「肥やし」になったのではないか。

学生の感想

【1年・寺原由夏さん(19)】自然と人生を結びつけている〈降ればかくれ曇ればひそみ晴れて照るかの太陽をこころとはせよ〉という短歌が印象に残りました。

【1年・久家三奈さん(19)】ツイッターで自分で撮ったフィルム写真を短歌と投稿している人がいて、すてきだと思っていた。私も写真を撮るのが好きなので、撮るときに浮かんだ気持ちを短歌や俳句にするのもいいと思った。

【2年・中村恭子さん(19)】短歌から牧水が見たであろう景色や思いを知ることができるので、短歌の魅力を知る機会がもっと増えるといい。

【3年・河邉昌汰さん(21)】短歌の五七五七七や俳句の五七五のリズムは、本当にきれいだ。メロディーがあるわけでもないのにスッと耳に入ってくる短歌や俳句は日本の大切な文化だと思う。

【1年・飯田亜衣さん(19)】短歌や俳句は短くてSNSがはやっている現代に逆に合っているなと、良さを初めて知った。

【3年・チェン宏さん(20)】〈白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも染まずただよふ〉という歌は中国ではとても有名。牧水が、白鳥と同じように夢を求めている過程で、内心は孤独だが一生懸命頑張り続けるという意味と思う。

平成 31 年(2019 年) 1 月 12 日(土)
宮崎日日新聞社提供

宮日と考える宮崎の明日～宮崎公立大学時事問題講義
若者と選挙

宮日と考える
宮崎の明日
～公立大時事問題講義から

○14○

若者と選挙
「私の争点」見つけて

伊佐賢太郎（いさ・けんたろう）報道部次長。1999年入社。報道部、日南支社、西都支局長、整理グループ次長などを経て現職。宮崎市出身。44歳。

現職の河野俊嗣氏（54）が3選を果たした昨年12月23日投開票の県知事選は、本県の知事選で初めて「18歳選挙権」が適用された意味でも重要な選挙だった。18、19歳の投票率は今月下旬に発表される見込みだが、全体の投票率は33・90％と過去最低を記録する寂しい結果となった。

改正公選法が2016年6月に施行され、若者の声を政治に届ける機会が広がった。国の将来を支えていく世代の1票は重要な意味を持つ。しかし、本県では10代の投票率は低迷している。18、19歳を含めた投票率は、同年の参院選が全国で2番目に低い33・61％。昨年1月の宮崎市長選は26・53％にとどまった。

知事選の報道では、少しでも有権者の関心を高めようと、宮崎日日新聞は河野県政の検証や、候補者への100問アンケート、農業や医療の現場で働く人の声を伝える連載記事などを掲載した。

知事選だけでなく国政選挙などでもこうした報道をしており、投票の判断材料にしてほしい。ただ、候補者や政党が掲げる政策が多岐にわたり、判断に迷うことも多いだろう。その時は、自らが関心がある分野に絞って公約や関連記事を読み、「私の争点」を見つけてほしい。

雇用、子育て、医療、介護など、当事者になって初めて直面する課題がある。それを解決するのが政治であり、その政治を担う者を選ぶのが選挙。みなさんの1票が日々の暮らしをつくっている。今年は12年に1度、4月の統一地方選、夏の参院選が重なる「選挙イヤー」。気になる記事を小まめにチェックし、1票を投じてほしい。

学生の感想

【1年・寺原由夏さん(19)】知事選の投票率が半分にも満たないのは残念なことと感じた。政治に関心を持たない限り、投票率を上げるどころか、社会状況を良くすること自体が難しくなるだろう。

【1年・瀬尾佑季さん(19)】県民の関心が低かったから知事選が低投票率であったとは言い切れないと思う。河野知事は知名度が高く、ある程度結果が見込めたため、投票に行く人が少なかったと思う。

【2年・市来采佳さん(20)】18歳から投票できる選挙制度は本当に意味があるのか少し疑問がある。私が18歳で投票した時は、何をもとに投票したらいいのか悩んだ。20歳からでいいのでは。

【1年・南来希さん(18)】新聞を読んでいると用語や選挙の仕組みについて難しい部分があるので、そういうものを解説するといいと思う。

【4年・渡久地里都さん(23)】政治が自分たちの暮らしにつながることを報道機関に促してもらうと同時に、若者もそれを認識することが重要と考える。

【1年・神代愛海さん(19)】インターネットでの投票を可能にすると、投票率が上がると考えている。さまざまな問題が生じる可能性があるが、投票率の上昇を目指すのであれば解禁すべき。

（11日の講義から）

平成 31 年(2019 年) 1 月 23 日(水)
宮崎日日新聞社提供

宮日と考える宮崎の明日～宮崎公立大学時事問題講義
ネット情報発信

宮日と考える
宮崎の明日
～公立大時事問題講義から
○15○

ネット情報発信
真偽確かめ責任感を

虚偽の情報で作られたフェイクニュースはSNS（会員制交流サイト）などで広がり、時に社会的混乱を招く。災害時には誤った情報によって人命を左右しかねない。最近の国内では熊本地震や西日本豪雨、北海道地震でもデマが拡散し、多くの地域住民を不安にさせ、混乱させた。

上原 幹生（かんばら・みきお）メディア企画部長。1995年入社、整理部次長、日向支局長、報道部次長、総務部次長などを経て現職。日向市出身。49歳。

発生を防ぐことは事実上不可能。また一般ユーザーにはそれらを完全にブロックする技術的手段も持ち合わせていない。情報の発信元をできるだけ確認し、デマにだまされない冷静な姿勢、情報発信に対する責任感が求められる。

問題なのは情報の真偽を確かめず、むやみに発信、拡散すること。悪意はなくても、自分が知らないうちに間違った情報の拡散に加担することになるかもしれない。

フェイクニュースやデマの「自分はシェアしただけだから関係ない」という意識は通用しない。反射的に「いいね！」やシェアするのではなく、なぜ「いいね！」したいのか、シェアしたいと感じたのか、考えてほしい。

ニュースをリアルタイムで求める現代社会では、メディア側が積極的に新しいニュースの見せ方を提供しなければユーザーに飽きられてしまう。技術革新が進む中、「次の一手」を目指して研究が続く。

若者たちは、小中学生の頃からパソコンやインターネットが身近にある環境で育ってきた「デジタルネイティブ世代」。「メディア」をツールとして扱うのにはたけているが、膨大な量であふれる情報から受け手が本当に必要とし、真偽を判断、分析、評価する力「メディアリテラシー」を身に付けてほしい。

学生の感想

【4年・渡久地里都さん(23)】インターネットには優れている面がある一方、誤った情報があふれている可能性が新聞などとは異なり高くなっている。正確な情報を得るためにネットと紙媒体を駆使しようと思った。

【1年・山内聡佳さん(19)】ネットで情報を発信する側も、受け取る側も責任感が十分に養われていないように思う。情報教育にもっと力を入れるべきではないか。

【1年・久保田夏貴さん(19)】ネットの情報を正しく判断し、うまく付き合っていくための能力「メディアリテラシー」を身に付けることが大切だ。

【1年・久家三奈さん(19)】SNSによるフェイクニュースの拡散は本当に怖い。誰でも情報を発信できる特徴が、言い換えれば誰でも情報をゆがめられるということなのだと思った。

【1年・湯浅智裕さん(19)】ツイッターは問題が起こりやすい。一度世の中に発言した言葉はもう二度と取り消せないという意識を持たない若者が多いと感じる。

【1年・神代愛海さん(19)】今後ますます社会はデジタル化していく。デジタルとアナログをうまく混合して、互いを頼りながら社会を築いていくべきだ。

（22日の講義から）
＝おわり＝